

## 田川校長のこと　～解説に代えて

若杉保久（暁星学園高等学校卒業生・会社役員）

私は、この十一月に暁星国際学園が創立三十周年を迎えると聞いて、お祝いの言葉を申し述べたいと心から思う者の一人である。

察しの良い方は、私が第二章に登場する「W君」であることに既にお気づきであるかもしれない。本文中で述べられているように、私は少年時代、「長崎中にその名をとどろかせた不良」であった。また昨今では、いわゆる個人情報というものの取り扱いがたいへんデリケートでもあり、ご配慮をいただいたのであろう。

私は四十五年前に田川校長に出会い、東京・九段の暁星学園で根気よくめんどうを見てもらったことがなければ、本当にその後も「不良」をつらぬき、その名を長崎どころか日本全国にとどろかせることになっていたかもしれない。

田川校長はよく「心の教育」という言葉を使われる。

暁星国際学園にかぎらず、キリスト教を背景に持つミッション・スクールというものに対しては、しばしば特別な精神世界のようなイメージが持たれがちである。学校説明会に出向き、そこで初めて校門近くにたたずむマリア像を目の当たりにし、また重い扉の向こうに広がる礼拝堂の空気に触れて多少のとまどいを覚えたというのは、よくある話である。

ご参考のために申し添えておくと、私自身はかつて今も、キリスト教徒ではない。だからこそ思うのであるが、本書を読んでおわかりいただけるように、田川校長の実践されてきた「心の教育」は実は特殊な考えや偏狭な精神世界に軸足を置いたものでもなんでもなく、むしろ国や時代を超えて、とても普遍的なものである。それはいつてみれば、世の中の「先生」と呼ばれる人たちが「そういうことができれば、それは理想的なんだけれど、現実には…」

と誰もが避けてきた部分を実直に地道に、丁寧に実行されているにすぎないのではないかとさえ思えるときもある。

田川校長は、まず子ども一人ひとりに差をつけずに平等に接していた。勉強ができる子どもを特別扱いすることもなかった。勉強ができない子どもには頑張れよというし、できる子どもにはもっ

と頑張れよといった。子どものやる気をなくさせるようなことは絶対にいわなかった。

また、子どもたちにはたいへんきめ細かく接していた。昨日まで学校を休んでいた、父親を亡くしたなど、子どもたち一人ひとりの置かれている状況や気持ちのコンディションを把握して、子どもたちに声をかけていた。

いつてみればそれだけのことであるが、これを心がけ、実行できる「先生」が、いまどれだけいるだろうか。

初めて教壇に立ったのが三十歳。昨今、大学を卒業してすぐに教員となれば二十三歳か二十四歳であるから、若き教師というにはやや遅咲きの感がある新米教師・田川茂は、子どもたちとの距離を縮める方法を教育学の理論書ではなく、子どもたちと実際に教室や校庭で接する中で伝わってくる感触の中に、手探りで求めていった。

そのことは、多感な時期を修道院ですごしはじめたという校長自身の生い立ちと関係があるのだろう。校長はよく、「信仰生活の中で、己に打ち克つ」ということをいつている。やはり普通の子どもと比べると、人一倍、自分と向き合い、自分と対話する時間の多い少年時代だったのだろう。そうした時間のうちに、やがて、自分だけではなくまわりの人間の心のありようも察することのできるアンテナのようなものが、彼の中で自然に育っていったのではないだろうか。

私が田川校長の教えを受けていて良かったと思う瞬間は、幾度ともなく訪れた。

なかでも思い出深いのは、今から十年ほど前に田川校長とともに九州に向かった折りのことである。とある用事のために校長に会った際、過日、長崎に車を運転して帰ったという話をしたところ、校長は、自分も自動車で九州へ行ってみたいと身を乗り出した。さすがに七十歳をまわる体にはこたえるのではないかと心配したが、どうしても、ということであつたので、校長を後部座席にのせ、もう一人連れを伴っての九州行きを決めた。目的は旅行であるが、ついでに学園の宣伝のために、あちこちの塾をまわることにした。

私は出発前に校長に、くぎをさしておいた。

「あつちこつちの父兄に、九州に行く」と電話をしないでくださいね。校長はえらいんやから、みんなが会いたい、会いたいといつてきて、收拾がつかなくなるんですよ。今回は三人で旅行なんだから」

夜の八時に木更津を発ち、朝五時に広島に到着した。そこで一休みして、やがて九州に入り、下関、筑豊、福岡と回った。

福岡でその日の最後の用事を済ませると、校長が何かいいたそうなそぶりをしてる。

